1小时，理解日语论文写作要领

上篇：论文基本结构

下篇：学术日语词汇

CC BY NC SA

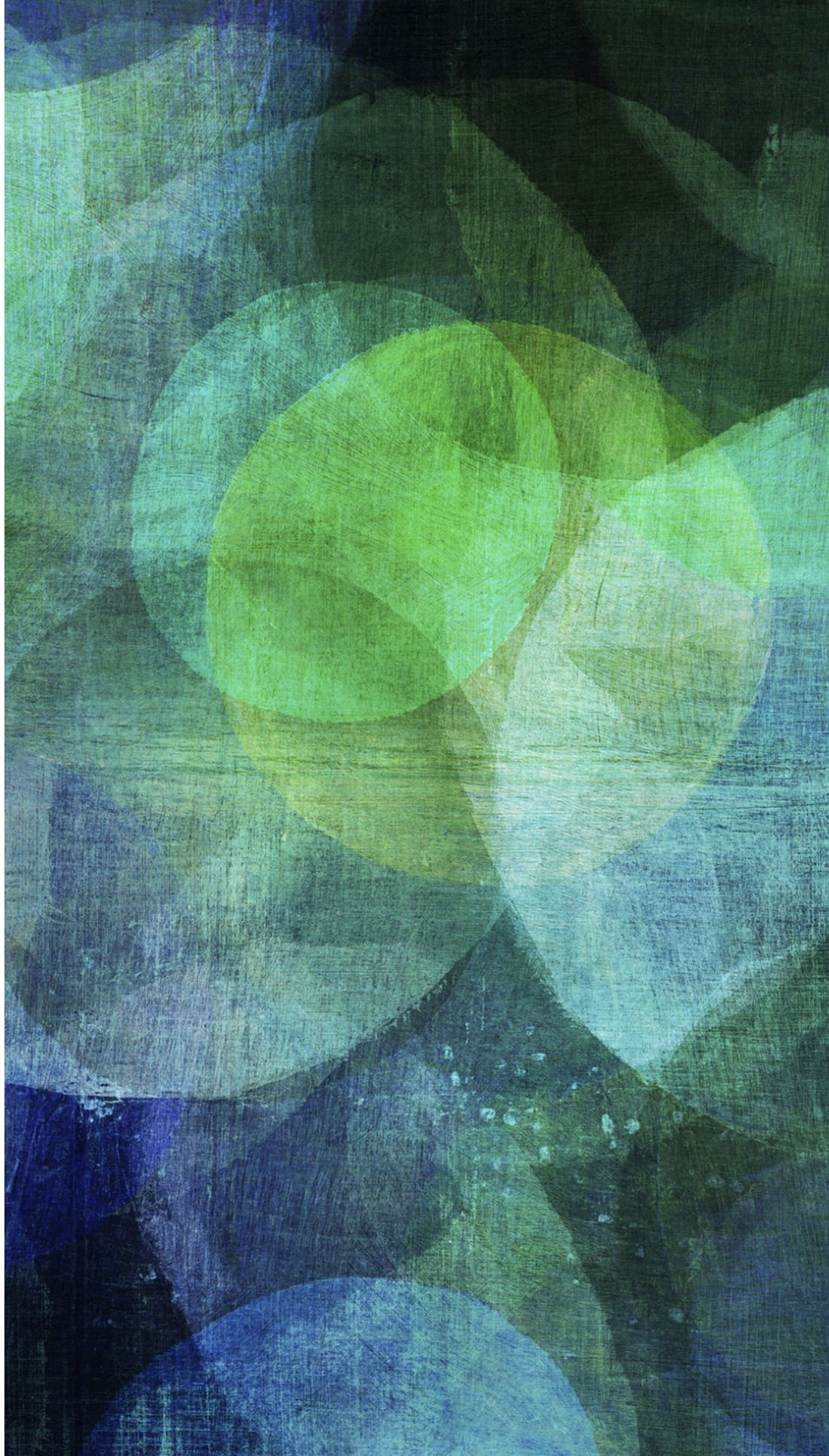
教育学研究科　包　福昇（楠丁、教育史D1、DC2）

今日の内容（上・下）

- 作法
  - 分量、書式，執筆プロセス，注、参考文献，
  - 段落、引用，図表・付録
- 構成
  - 構成の考え方，問う－目的，調べる－先行研究，選ぶ－資料と方法，確かめる－結果と分析，裏付ける－考察，
  - まとめる－結論，校正する－提出前の原稿チェック
- 表現
  - 表現の考え方，正確な言葉選び，正確な表記，学術的表現，
  - 論文の文体，明晰な文，明晰な文章展開，書き手の責任
- （修論関連）

＜上編＞

論文の作法および基本的構成



京都大学附属図書館学習サポートデスク＿留学生学習サポート講習会

概観

- レポート（論文）は、書くものである一方、読まれるものである。

→考察と作法　　／相手を意識する

- 論文は、活字化され、流通を図るもの。

→コミュニケーション　　／論拠、証拠をきっちり

- 論文は、情報を体系化したもの。著書は、論文を体系化したもの。

→影響力　　／論証の戦略

➡一旦原稿を受け止めたら、「先生」は査読機械モードに

作法

- 分量、書式（例）
  - **本文**：横書き、1枚＝40字×36行、図表もこのうちに含みます。字は10ポイント。（研究論文22枚、研究ノート22枚、資料紹介22枚、書評10枚、インタビュー記録22枚）
  - **要約**：43字×7行、フォントは9ポイント。本文は18行目からはじめること。
  - **主題、副題、氏名、所属、章題、参考文献**：…
  - **注**：文末脚注のフォントは9ポイント（…）２行目以降の始まりを１行目と揃えること

http://kyouikushigakkai.jp/publications/bulletins/論文投稿に際しての留意事項

作法

- 注（例）
  - 説明注と引用注と二種類
    - 前者は用語・人物・事象の説明、必要最小限
    - 後者は資料情報の典拠を示すもので、詳しく正確に
  - ハーバード・システムとヌーメリック・システムと二方式
  - 記し方は首尾一貫が大事、校正時に用心
    - 本：著者名『書名』出版社、発行年、頁数。
    - 論文：著者名「論文名」『所収誌名』巻号（年月）。
    - 「同前」、「前掲〇〇」で省略を活用

➡ 先行研究との区別を示し、内容の信頼性・説得力・オリジナリティーを確保する上で重要で必要

①ハーバード・システムの例

勝田守一が、戦後改革期に文部官僚として、『中等学校青年学校公民教師用書』や中学校向け社会科の学習指導要領の編纂に携わったことはよく知られている。また、近年ではこれらのプロジェクトで勝田の果たした具体的役割についての研究もなされている(片上 1993)。ここで注目しようとしている教科書は、その勝田が文部省退職後に編集にあたった日本書籍の中学校向け社会科教科書である。その巻頭に「『中学生の社会』で学ぶ人たちへ」と題する次のような文章がある。

「現代の生活」は、「わたし」つまり自分の問題から出て、平和な世界をきずきあげるための問題に進んでゆく。その間に、家庭や、郷土や、経済の生活や、政治のしくみなどについて、 べんきょうできるようにくみ立ててある。まず、自分という個人についてはっきり考え、社会生活というものに目をひらいてゆくことがだいじだからである。(安倍他 1955b:3-4)

一般には、集団的な著作物である教科書について、その内容を編集者個人の思想と結びつけて解釈するのは困難である。しかし、筆者はこの文章には、勝田の社会科教育構想が色濃く反映されていると考える。その根拠として、たとえば、1952 年に勝田の執筆した「社会科をどうするか」という文章をあげることができる。ここで勝田は、単なる事実の記憶としての教養主義や、民主主義の形式的な理解を越えて、「社会心理学的な観点での自己改造の問題」を中核とした、実践的知性の養成を目指すべきであると述べている(勝田 1972:257-258)。このように、あくまでも「自己」=「わたし」を出発点として社会への認識を発展させる構想は、勝田の社会科教育論の核心に位置するものだった。

(文末)

<参考文献>

安倍能成他　1955a『中学生の社会　現代の生活　上』日本書籍。

——　1955b『中学生の社会　現代の生活　下』日本書籍。

片上宗二　1993　『日本社会科成立史研究』風間書房。

勝田守一　1972　「社会科をどうするか」『勝田守一著作集1　戦後教育と社会科』国土社。

②ヌーメリック・システムの例

勝田守一が、戦後改革期に文部官僚として、『中等学校青年学校公民教師用書』や中学校向け社会科の学習指導要領の編纂に携わったことはよく知られている。また、近年ではこれらのプロジェクトで勝田の果たした具体的役割についての研究もなされている[1)]。ここで注目しようとしている教科書は、その勝田が文部省退職後に監修にあたった日本書籍の中学校向け社会科教科書である。その巻頭に「『中学生の社会』で学ぶ人たちへ」と題する次のような文章がある[2)]。

「現代の生活」は、「わたし」つまり自分の問題から出て、平和な世界をきずきあげるための問題に進んでゆく。その間に、家庭や、郷土や、経済の生活や、政治のしくみなどについて、 べんきょうできるようにくみ立ててある。まず、自分という個人についてはっきり考え、社会生活というものに目をひらいてゆくことがだいじだからである。

一般には、集団的な著作物である教科書について、その内容を編集者個人の思想と結びつけて解釈するのは困難である。しかし、筆者はこの文章には、勝田の社会科教育構想が色濃く反映されていると考える。その根拠として、たとえば、1952 年に勝田の執筆した「社会科をどうするか」という文章をあげることができる。ここで勝田は、単なる事実の記憶としての教養主義や、民主主義の形式的な理解を越えて、「社会心理学的な観点での自己改造の問題」を中核とした、実践的知性の養成を目指すべきであると述べている[3)]。このように、あくまでも「自己」=「わたし」を出発点として社会への認識を発展させる構想は、勝田の社会科教育論の核心に位置するものだった。

(文末)

<注>

1) 片上宗二『日本社会科成立史研究』(風間書房、1993 年)を参照。

2) 安部能成他編集『中学生の社会　現代の生活　上』日本書籍、1955 年、3-4 頁。なお、この教科書の編集委員は合計で 10 名。その一人である岩浅農也氏の証言によれば、安倍能成の編集委員会委員長としての役割は名目的なものであり、勝田守一が編集方針の作成について中心的な役割を担ったとのことである(1994 年 11 月9日に筆者が岩浅農也氏に対して行ったインタビューによる)。

3) 勝田守一「社会科をどうするか」『勝田守一著作集1　戦後教育と社会科』国土社、1972 年、257-258 頁。

出典：いずれも駒込武「「注」についての注釈ー「作文」と「論文」を分つものー」駒込ゼミ資料

作法

- 段落、引用
  - 一段落で「言いたいこと」は一つにとどめる
    - 詰め込みすぎは禁物
    - トピックセンテンスを最初（／最後）に置く
  - 引用＝「区別」

「だるまさん[1]がころんだ[2]。うさぎさんがはねた。」[3]この文章は、朝野かすみという詩人が24歳のときに書いた散文詩「だるまさんがころんだ」の書き出しである。[4]

ここでだるまさんは、うさぎさんと一緒に遊びたかったのだが、…

1　禅宗開祖の達磨の座禅姿を模した置物。縁起物とされる。

2　こどもの遊びの一種。鬼が「だるまさんがころんだ」という掛け声を唱えている間だけ、他の参加者は動くことができる。

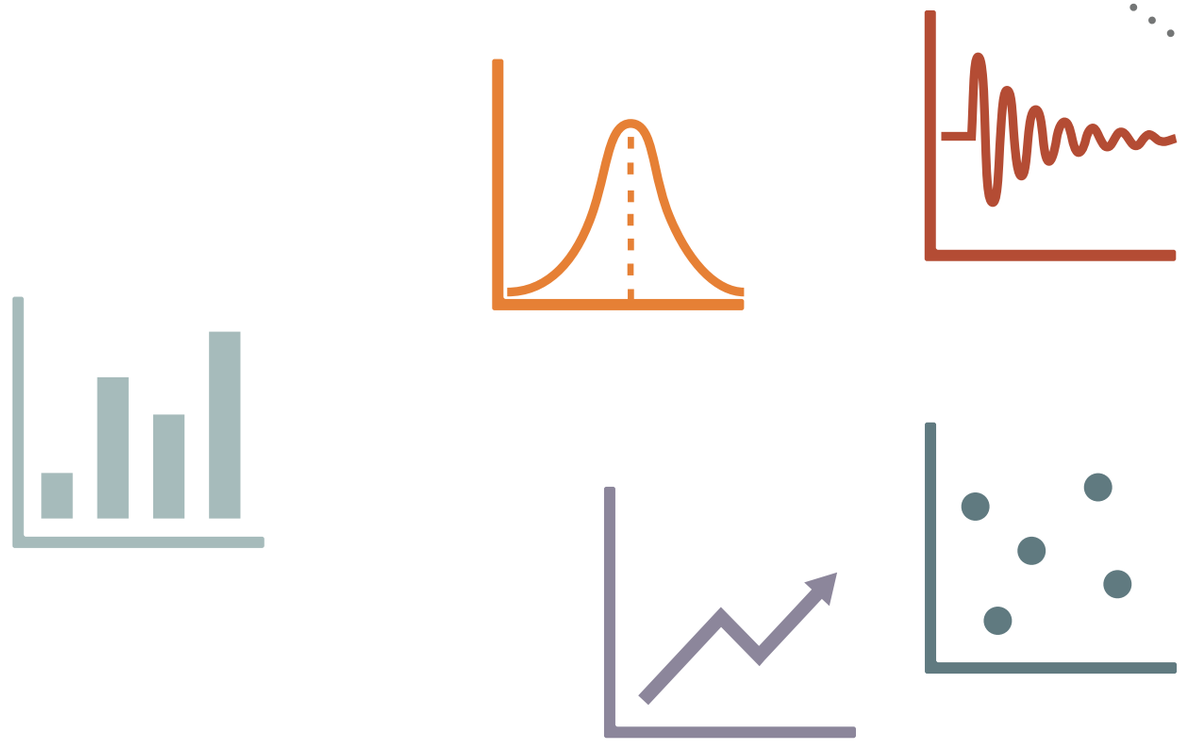
3　朝野かすみ『だるまさんがころんだ』〇〇出版、19XX年。

4　この詩を書いた1984年、朝野は…

出典：前掲『大学生の文章術』、117頁。

作法

- 図表、付録
  - オプション
    - 本文の理解を深める
    - 研究価値の向上
  - 図表：図、表
  - 付録
    - 年表、年譜
    - インタビューの記録、史料の写し
    - 本文の内容と関連する法令や条約
    - （音声、映像など）



執筆プロセス

（指導教官・同窓とのやりとりも含め）

ブレインストーミング

自分の「調査キーワード」を設定

J-STAGE　CINII

概要調査

基本情報の確認、

先行研究の収集と分析

連続

進行

オリジナル調査

発展的内容の資料調査、

実地調査など

テーマの決定・絞り込み・修正

メモをためる　要点や気づいたことを書きためる、年表や図をつくる、資料の重要箇所を切り貼りする、など

アウトライン作成

章立て・構成をつくってみる

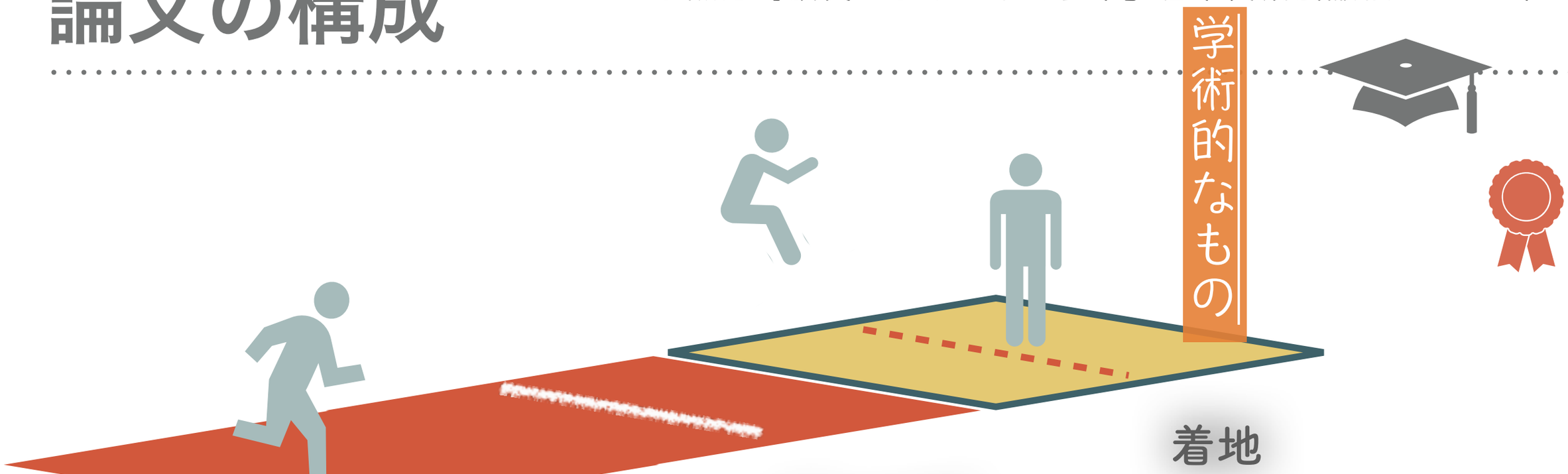
文章化

メモやアウトラインを少しずつ文章にする

出典：前掲『大学生の文章術』、72頁。

論文の構成

石黒圭『論文・レポートの基本』日本実業出版社、2012年。



序論

- 問いそのもの
- オリジナリティ
- 答える道筋

三つのことを示す

本論

- 結果と分析
- 考察

データや結果、推論などの提示

結論

- 研究全体のまとめ

読者に配慮した要旨

論文は六つ揃えが原則

序論

①問う

目的（Introduction）
自分の研究で明らかにしたい問いを示す

②調べる

先行研究（Introduction）
関連する先行研究を紹介し、本研究のオリジナリティを示す

③選ぶ

資料と方法（Material and Method）
問いを明らかに論証するためのデータの概要と方法を示す

本論

④確める

結果と分析（Result）
分析を経た調査の結果を示し、問いに答える

⑤裏付ける

考察（Discussion）
なぜそのような結果になるのか、その理由を考える

結論

⑥まとめる

結論（Conclusion）
①～⑤の論証のプロセスを要約し、今後の課題を示す

目的ー問いを立てる

問

- 研究史の体系における位置付け
- 未解明の新しい発見

→

興味・関心

- 先行研究の調査
  - 面倒・忍耐…
  - ドキドキ・面白い！
- 自分で創り出すもの
  - 自由！
  - 苦痛…

主観的

- 論証でき、答えが出せるサイズ
  - 学術的価値
  - 自分の力量にふさわしい

言葉の定義を
明確に〜

疑問文を含む一文で

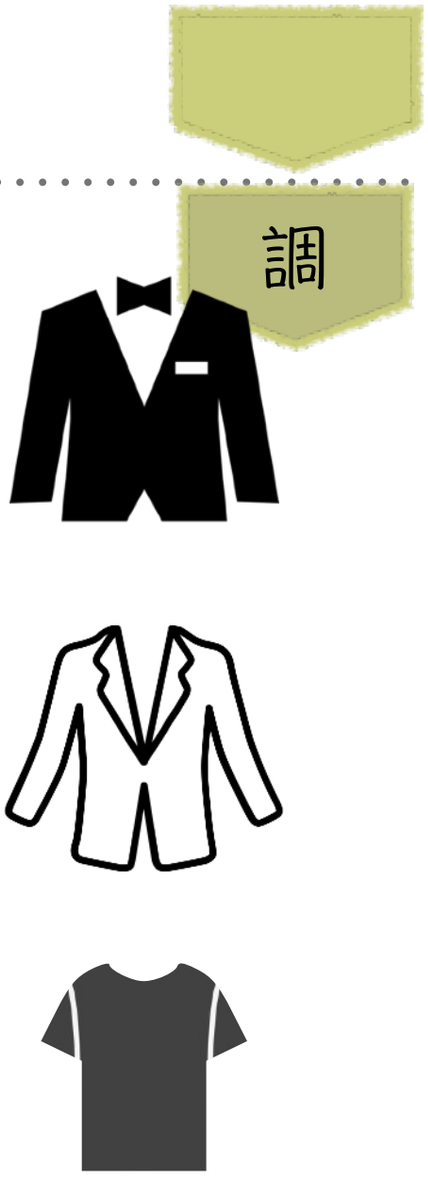
絞り込む！

問いを設定しよう

「〇〇について」＝　テーマ → 問い

発見……探究心

調べる？ー先行研究



専門性	本（著書）	雑誌（学術誌）	辞典・事典
専門	研究書	原著論文	（なし）
入門	入門書・概説書	調査論文	専門辞典・事典
一般	一般書・実用書	エッセイ	一般辞書

参考文献は、自分の主張を、研究史のどこに位置付け、
どこが新しいかを示すために挙げている。＜勉強量、誠実さ＞

引用は服装のようなもので、
論文はフォーマルな服装が求められるジャンル。

かれこれ　照らし合わせる　考える

専門性	本（著書）	特徴
専門レベル	研究書	内容が高度、難解、高価、 ２００本以上の参考文献が並ぶ
入門レベル	入門書・概説書	網羅的かつ分かりやすく説明、 孫引きになる恐れ、知見の参考可
一般レベル	一般書・実用書	参考文献リスト・索引などない、 論文に引用の価値なし

かれこれ　　照らし合わせる　　考える

専門性	雑誌（学術誌）	特徴
専門レベル	原著論文	査読あり、学会誌論文 (△大学の紀要・研究年報)
入門レベル	調査論文	最先端の研究動向の整理・概観、 学術的な価値有、オリジナリティ欠
一般レベル	エッセイ	学術的な価値持たない

かれこれ　照らし合わせる　考える

専門性	辞典・事典	特徴
専門レベル	（なし）	（なし）
入門レベル	専門辞典・事典	辞典＝言葉、事典＝事柄、 通説、参考文献に普通挙げない
一般レベル	一般辞書	学術的な価値持たない

調べる―先行研究

調

サイト名	概要	注意点
Google	一般的な検索エンジン。幅広い検索が手軽にできる。	ゴミ（不必要な情報）が多く引っかかる。
Google Scholar	研究専用の検ジン。研究に関わるもののみをピックアップできる。	日本国内の文献の検索がやや弱い。
CiNii	日本国内の学術論文を網羅するサイト。論文検索と大学蔵書検索分別。	著書と海外の文献の検索に弱い。
NDL-OPAC	資料の検索にも向いてる。ﾘｻｰﾁ･ﾅﾋﾞは、本の種類や研究分野から検索可	海外の文献の検索に弱い。
各分野の研究機関	分野の代表的研究機関は有益。	その存在が知られていないことが多い。
自分の大学の図書館	所蔵、取り寄せ、依頼購入など。	所蔵冊数に限界。
Wikipedia	基本概念は手軽に知ることができる。辞書類にWeblioも便利。	オリジナルの情報源が別にあるため、要追跡

かれこれ　　照らし合わせる　　考える

“

助けてもらう
^_^v

巨人の肩のうえに立つ。

自分なりの先行研究史を組み立ててみて、

そこに自分のささやかなオリジナリティを加える

前提の問い
→自分の問い＜絞る＞

✕剽窃＝犯罪行為

選ぶ―資料と方法

選

調査　→データ　→問いの回答

	-量的調査-	-質的調査-
どちらか自覚	アンケート	事例研究
有効か自問 ＋	統計 ＜客観性、厳密性＞	良質な（典型的）データ （自分の根拠を持つ／無作為抽出法）
	量、比較	量、多様

６つの調査方法

調査方法	代表分野	応用
実験	理科系	人を対象にした実験
観察	天体観測	フィールドワーク
内省	哲学	概念の検討
アンケート調査	量的分析	協力者への配慮、パイロット調査、フェイスシート
インタビュー調査	質的研究	（半・非）構造化インタビュー
文献調査	文学、歴史	一次資料、二次資料

確かめる―結果と分析

自分の立てた問いに対する答えの正しさを、
具体的なデータとともに示すところ。

確

分析

分析軸の確定　(e.g. 言語、教育、政策)

分析因子の制御　因子が多数存在の場合に、
安定・活躍因子を特定・制御

結果

文字　図表

レポート

- 序論
  - 第一節　問題提起
  - 第二節　先行研究
  - 第三節　資料と方法
- 本論
  - 結果
  - 分析
- …
- …

段落

- 結果
  - トピック・センテンス(**TS**)

段落の中心的なトピックとそのコメント

  - サポーティング・センテンス(**SS**)

TSを支える根拠や例、引用

  - コンクルーディング・センテンス(**CS**)

段落全体のまとめ、TSと強い関連

- 分析
  - TS-SS-CS…
- …

図・表について

表５　ラーコモ利用者数調査

時間帯	平均値
午前中	58
午後	73

キャプションをつける

数値は右寄せ

文字サイズは
本文より小さめに設定

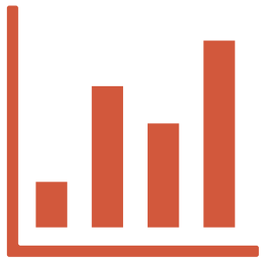
印刷に
配慮を

折れ線グラフ

変化を
知りたい

円グラフ

全体の割合を
知りたい



棒グラフ

複数の項目の値を
比較したい

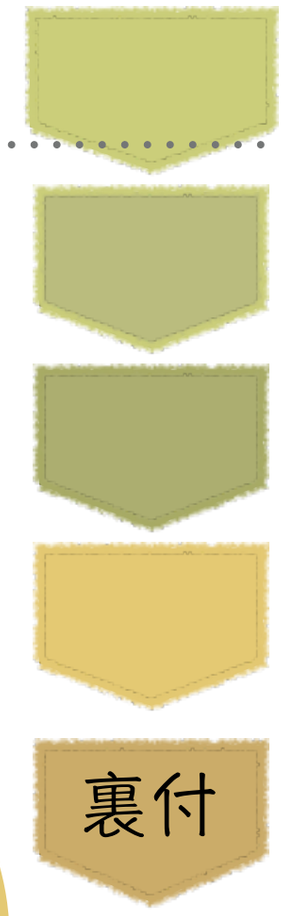
点グラフ

分布で特徴を
見つけたい

裏づける―考察

「結果と分析」で示されたデータの意味を**解釈**し、
そのような結果が得られたのは**なぜ**か、
その理由を説明し、**裏付ける**ところ。

目に見える現象を手がかりに、目に見えない
メカニズムをあぶり出すプロセス。



結果！

データ志向　現象の分類、整理、記述

モデル志向　メカニズムの抽出

なぜ？→推論

別の調査実行と
先行研究の収集で　憶測を防ぐ

まとめる―結論

先行の一連の過程を**要約**したものを書くところ

問いと答えのズレやヒズを
明らかにしてくれる鏡

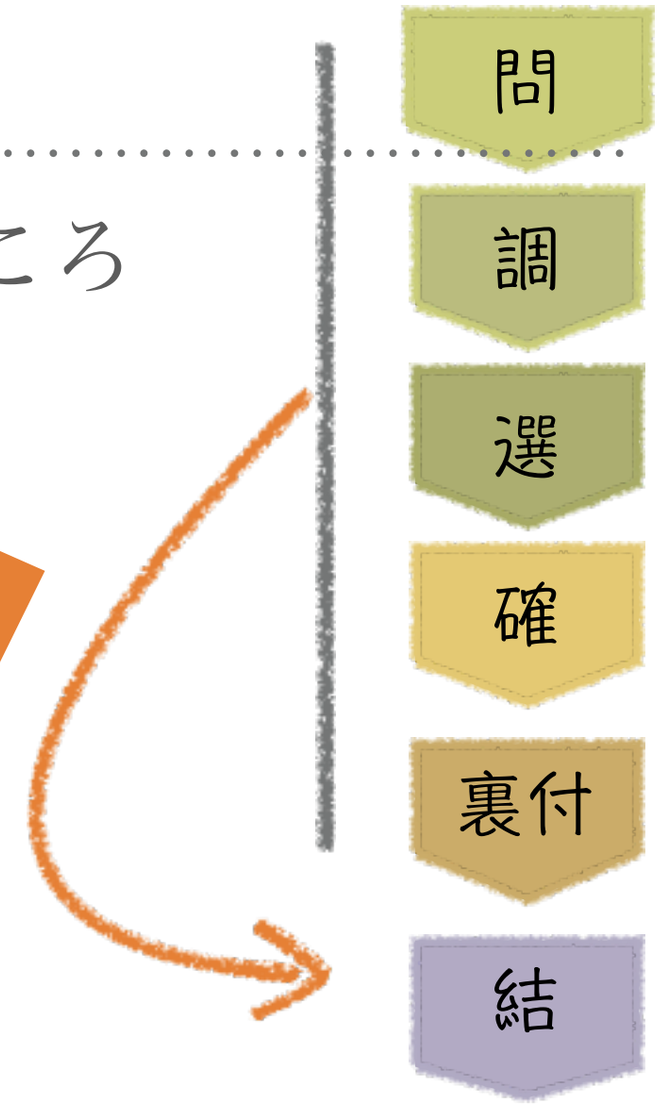
(執筆の途中でも活用)

独立したもの

重複OK

今後の課題は今後の研究の
見通しの概観(*opt*)

到達点とビジョン



問いへの回答含む、
論文の筋が通っている

校正する―提出前の原稿チェック

校正５項目

項目	説明
番号の確認	執筆途中の構成変更
誤字・脱字	変換ミス
表記の統一	例、「行う／行なう／おこなう」
参考文献の照合	引用文との関連 筆者氏名の順番
紙面の見やすさ	字体、空行、段落分け

執筆プロセス

（指導教官・同窓とのやりとりも含め）

ブレインストーミング

自分の「調査キーワード」を設定

J-STAGE　CINII

概要調査

基本情報の確認、

先行研究の収集と分析

連続

進行

オリジナル調査

発展的内容の資料調査、

実地調査など

テーマの決定・絞り込み・修正

メモをためる　要点や気づいたことを書きためる、年表や図をつくる、資料の重要箇所を切り貼りする、など

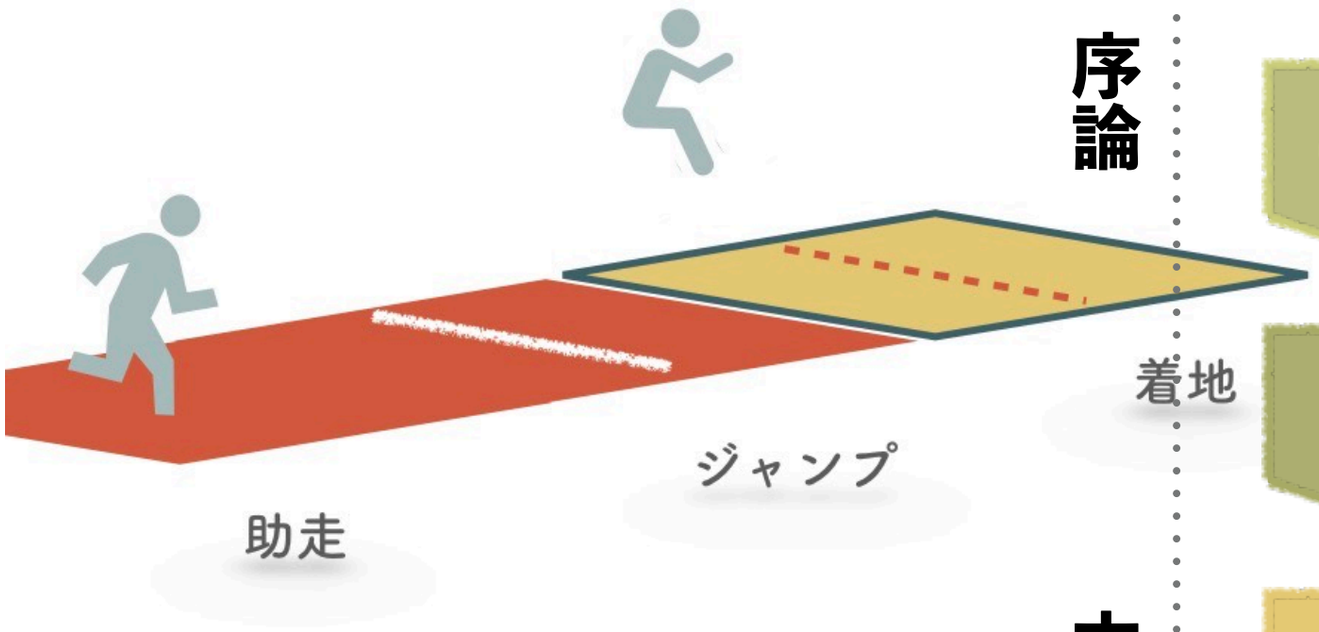
アウトライン作成

章立て・構成をつくってみる

文章化

メモやアウトラインを少しずつ文章にする

出典：前掲『大学生の文章術』、72頁。



序論

①問う

②調べる

本論

③選ぶ

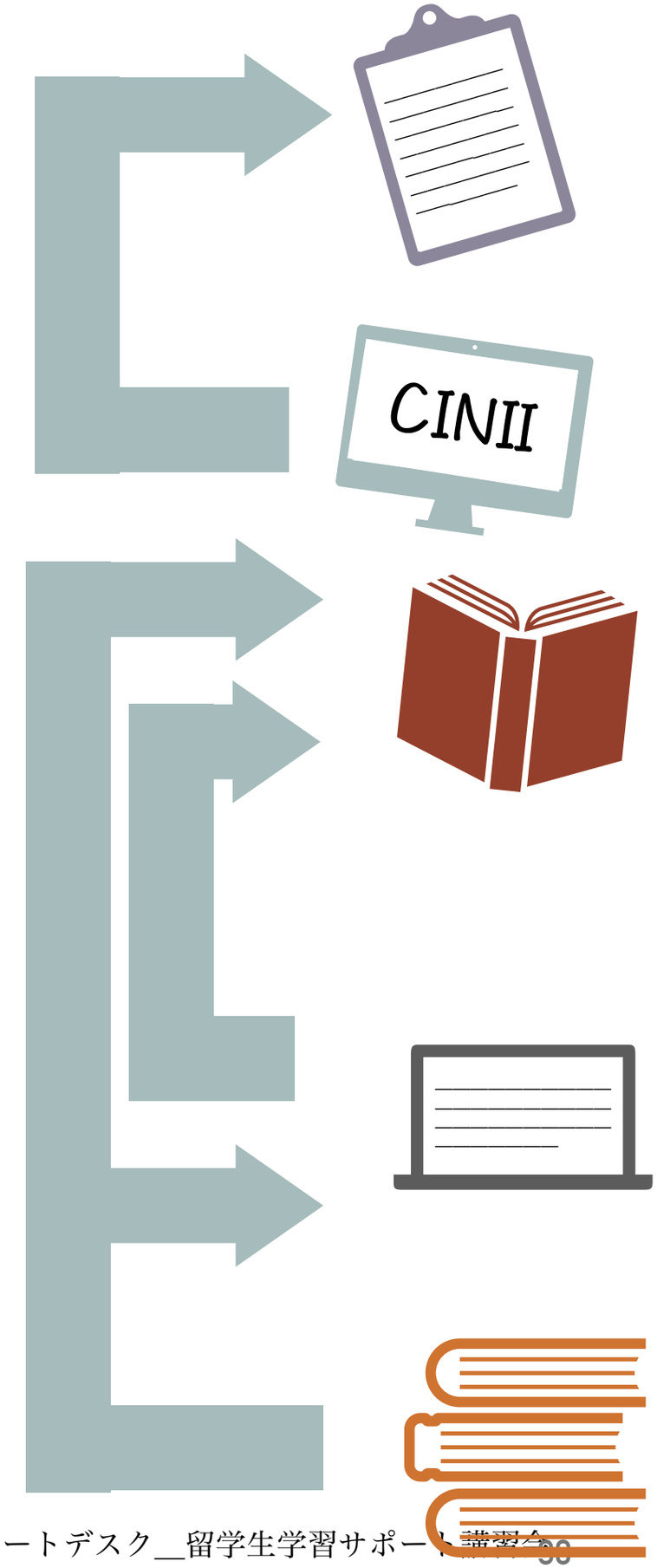
④確める

⑤裏付ける

結論

⑥まとめる

（校正）



参考文献

- 石黒圭、『論文・レポートの基本』、日本実業出版社、2012/03。
- 『大学生の文章術　レポート・論文の書き方』、旺文社、2015年。
- 駒込武、「「注」についての注釈ー「作文」と「論文」を分つものー」、駒込ゼミ資料
- 近江幸治『学術論文の作法ー〔付〕小論文・答案の書き方』、成文堂、2011年。

ご清聴どうもありがとうございました。